トピツク　３８

5世紀後半の巫女埴輪
群馬県伊勢崎で出土 保存状態も良好



西上之宮遺跡で出土した、巫女の姿を表現した人物埴輪＝伊勢崎市で（県埋蔵文化財調査事業団提供）

群馬県は、伊勢崎市西上之宮町の西上之宮遺跡で、**5世紀後半につくられた人物埴輪**（はにわ）が出土したと発表した。**巫女（みこ）の姿を表現**したもので、県内では人物埴輪が広く普及する以前の貴重な資料という。保存状態も良く、28日から渋川市北橘町の県埋蔵文化財調査センター発掘情報館で初公開する。

人物埴輪は今年7月、古墳の周囲に掘られた堀の中から見つかった。頭部から胴体まで約40センチが残り、髪を頭上で結い上げた「古墳島田」と呼ばれる髪形や、肩から掛けた襷（たすき）が特徴。左手には用途不明の棒状の祭具を持っている。

顔や襷、髪を結ぶひも、腕輪などには赤い彩色が施され、指や鼻の穴まで細かく表現されている。頭部と胴体はつながった状態で見つかり、細かな造形や彩色も残っていた。

人物埴輪は5世紀中頃に畿内で登場し、県内では5世紀後半から確認されている。

県内で**広く普及するのは6世紀以降で**、**今回の埴輪は初期の姿を伝える貴重な資料**。

県文化遺産課の担当者によると、当時の衣服などは残りにくいため、埴輪は服装や装飾を具体的に知ることができる重要な手掛かりになるという。同遺跡では利根川の河川改修に伴い、2020年度から発掘調査が進められ、これまでに古墳11基が確認された。

埴輪が出土した1号古墳は**墳丘長約45～50メートルと最大規模で、舟形石棺のふたも見つかって**いる。担当者は、地域の有力者の墓だったとみており、今回の立派な人物埴輪の発見で、被葬者の権勢が改めて裏付けられたと説明する。

「伊都国」福岡県糸島市の弥生時代の遺跡群、中国や朝鮮半島との交流を示す木製品の出土相次ぐ…「西の玄関口の役割裏付け」



福岡県糸島市深江地区にある弥生時代の遺跡群で近年、中国や朝鮮半島との交流を裏付ける木製品の出土が相次いでいる。糸島地域は中国の歴史書「**魏志倭人伝**」に記された「**伊都国**」の所在地として知られており、**深江地区一帯が海外の先進文化を受け入れる窓口だった様子が具体的に浮かび上がってきた。**（白石知子）

唐津湾に面する深江地区には、弥生時代中期後半から古墳時代初頭（紀元前１世紀～紀元後３世紀後半）にかけて港湾集落があったと考えられてきた。

１９９０年代初頭に、同地区の深江井牟田遺跡から中国式銅剣２本や、古代中国・漢の出先機関だった楽浪郡（現在の平壌付近）の多様な土器が多数出土し、大陸との交流がうかがわれたためだ。東隣にある深江城崎（じょうざき）遺跡で**２０２５年**、**弥生時代後期初頭から前半（１世紀頃）の遺構**から、**木製の台「案」が初めて完全な形で出土した。**天板は幅約６５センチ、奥行き４０センチで、脚の高さ約１９センチ。指物技術で組み立てられており、漢製の案を模倣して国内で作られたとみられる。天板には刃物による傷が多数あるため、まな板として使われたとの見方があり、儀礼や供宴に用いられた可能性もある。案の近くでは、船の部材や背負子（しょいこ）など、港としての機能を示す遺物が見つかり、港湾集落があったことが裏付けられた。特に注目されるのは、準構造船の内部を仕切る幅１・４メートルの隔壁だ。

準構造船は、丸木舟の側面を板でかさ上げして大きくした船。久宝寺遺跡（大阪府）で出土した外洋船とみられる３世紀後半頃の準構造船が復元幅約１・５メートルで、調査を担当した市文化課の江崎靖隆さんは**「この準構造船も、朝鮮半島、中国など遠方まで航海可能な規模だったと考えられる」**とする。

深江城崎遺遺跡では、**２１年度**にクジラが描かれた弥生土器が出土して一支（いき）国の王都だった原の辻遺跡（長崎県壱岐市）に続く国内２例目だったことから、一支国とも交流があったと考えられている。

隣接する**深江石町遺跡では２４年度**、**弥生時代後期前半の遺構**から、中国・漢で作られた**木製の櫛（くし）「篦（び）」が国内で初めて出土した。**長さ７・１センチ、幅５・５センチ、厚さ０・１～０・５センチ。歯は細かくて本数が多く、髪の汚れを取り除くために使われたとみられる。こうした木製品が出土したのは、深江地区一帯が低地の湿地帯で、木材の保存状態が良かったことも要因だ。深江石町遺跡では、湿地を利用して木材を穴の中で保存していた痕跡があり、**２２年度**には**製作途中の木製のよろい**が見つかったことから、木材加工の拠点だった可能性もある。**魏志倭人伝は伊都国について、代々の王は「女王国（邪馬台国連合）に統属」し、漢の後の王朝・魏の出先機関だった帯方郡の使者が常駐していたと記す。女王国と連携して諸国を監視する「一大率（いちだいそつ）」が置かれ、使者がもたらした物や文書を確認していた**としており、伊都国が内政、外交上特別な地位にあったことが解る**伊都国の王都は、深江遺跡群の北東約１０キロに位置する三雲・井原遺跡群とされる。**対外交流の拠点とみられる遺跡は、**０３年の調査**で玉造工房跡が見つかった**潤地頭給（うるうじとうきゅう）遺跡**など、当時の海岸線沿いに複数ある。中でも深江地区と、**糸島半島東側の今宿五郎江遺跡（福岡市西区）**は、出土した楽浪系の土器の数や多様さで突出し、特に重要な拠点だったと考えられている。

西谷正・九州大名誉教授（東アジア考古学）は「準構造船が出てきたことで、深江地区の『西の玄関口』としての役割が裏付けられた。伊都国の外交や交易の様子を明らかにする手がかりとしての意義は大きい」と話した。



木製の櫛「篦（び）」
（深江石町遺跡出土）＝糸島市提供



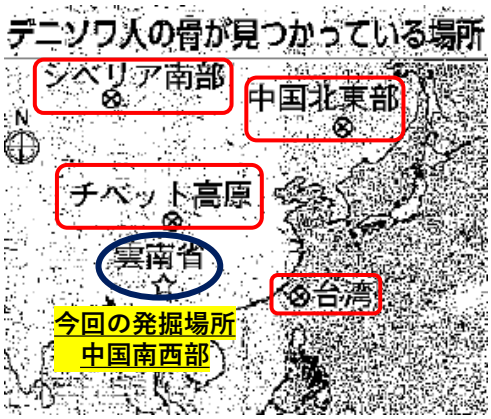
木製の台「案」が初めて完全な形で出土した。
天板は幅約６５センチ、奥行き４０センチ
脚の高さ約１９センチ。
（深江石町遺跡出土）＝糸島市提供

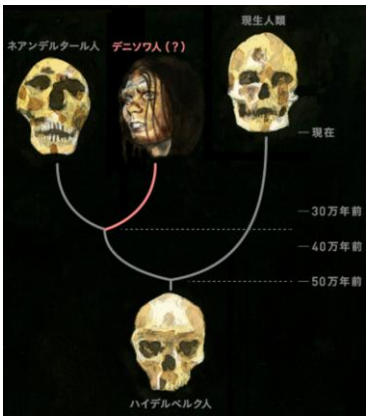
読売新聞オンライン＝yahooニュース転記

トピック　３６

ー日本人のゲノムには、デニソワ人由来の遺伝子が一部存在ー
謎多きデニソワ人・中国南西部にも？

シベリア南部の洞窟で発見された骨のゲノム（遺伝子情報）解析で2010年に存在が報告されてからも、多くの謎につつまれたデニソワ人が、中国南西部にもいたことがわかったと中国科学院などの研究グループが9月９日付の科学誌「ネイチャー」に発表しました。
これまでデニソワ人の骨は、チベット高原や中国北東部、台湾周辺の海底などで見つかっていますが**中国南西部で見つかったのは初めて**。現在の東南アジアやオセアニアの現生人類集団はデニソワ人由来のゲノムの一部を受け継いでおり、デニソワ人と現生人類が中国南西部で混血した可能性が指摘されております。研究グループは、雲南省の標高2370mの洞窟を発掘。出土した６万個以上の動物の骨などの破片に含まれるタンパク質を分析した結果、腕の骨１個と頭の骨２個、歯４本がデニソワ人のものとわかりました。これらの骨や歯は少なくとも４人のもので、**年代測定は約16万7000年～約13万4000年前に生きていたことを示しました。**デニソワ人は頭骨をもとに顔が復元された例がありますが、ほとんどゲノムやタンパク質の分析データーでネアンデルタール人の姉妹種と確認されたものの、どのような人々だったかはよくわかっていません。今回腕の骨が見つかったことで体の大きさなどを推測する手がかり得られました。





トピツク　３５

弥生時代の大型建物跡見つかる、近畿最大級の規模　祭祀空間か　滋賀

滋賀県野洲市の中畑・古里遺跡で、弥生時代中期末～後期初頭（**紀元前後、約2千年前**）とみられる**大型掘立柱（ほったてばしら）建物跡が見つかった**。滋賀県文化財保護協会が4日、発表した。近畿地方で**最大級の規模**で、集落居住域から離れた位置に単独で立地していることなどから、**「聖域的な祭祀（さいし）空間」**だったと考えられるという。
県文化財保護協会などが、大型店舗の出店計画に先立ち、昨年12月から約9400平方メートルの土地を発掘調査した。
見つかった建物跡は、短辺約7メートル、長辺約18メートルの長方形で、床面積は約126平方メートル。柱穴の規模は短軸1.0～1.5メートル、長軸1.5～2.5メートルだった。
柱穴内から出土した土器の特徴から、弥生中期末～後期初頭のものと推定された。
類似の建物では、弥生時代最大級とされる池上曽根遺跡（大阪府和泉市・泉大津市）の建物跡（面積約133平方メートル）に匹敵する大きさだ。
柱穴に斜路が設けられている構造は、近接する伊勢遺跡（守山市）の弥生後期の大型建物と共通しており、その「祖型」と位置づけられるとしている。
また、中畑・古里遺跡は、古代より神が宿ると言い伝えられてきた三上山（近江富士）や、日本最大の「大岩山銅鐸（どうたく）」が見つかった大岩山遺跡が近くにあり、この建物がこれらと関連している可能性も考えられるという。同志社大歴史資料館の若林邦彦教授は**「建物の特殊性だけでなく弥生中期の祭祀空間のあり方を考える上でも重要」としている。**



中畑・古里遺跡で見つかった弥生時代の大型掘っ立て柱建物跡=滋賀県野洲市

トピック　３４

東日流外三群誌・語部語録の30万・40万説の真実味が増すのでは？

40万年前の遺物を洞窟で発見、現生人類以前の「複雑で豊かな」社会の存在示す

（CNN） イスラエルで考古学者たちが、**ネアンデルタール人以前の人類に近い生物が使用していた洞窟を発見**した。彼らは最大で**約40万年前に現地で暮らしていた**とみられる。
この時代についてはほとんど知見がなく、当該の洞窟は科学者が調査できる数少ない遺跡の一つとなる。**洞窟はイスラエル北部のフレイディス**という町の郊外に位置しており、建設工事の影響を受ける予定だったことから、考古学者たちが調査を行うことになった。
1970年代の研究者たちは当初、この洞窟は約20万年前に使用されていたと考えていた。
イスラエル考古学庁の考古学者コビ・バルディ氏は25日、CNNに対しそう語った。
しかし現在、バルディ氏と同僚のロン・シメルミッツ氏は、**この洞窟が最大で約40万年前**の時点で居住空間として利用されていたことを明らかにした。シメルミッツ氏はハイファ大学考古学准教授を務める。両氏は**握斧（あくふ）、皮なめしに使用する掻器（そうき）、刃物**など、**火打石製の石器を発見**したことから、**この年代を特定した。**これらは当時この地域に住んでいたネアンデルタール人以前のヒト族に関連するアシューロ・ヤブルーディアン文化に特徴的な遺物だ。バルディ氏はCNNに対し、この洞窟が従来考えられていたよりもはるかに古いことが判明したのは「大きな驚きだった」と語った。この洞窟は約40万～25万年前にレバント、すなわち近東地域に居住していたアシューロ・ヤブルーディアン文化の人々によって使用されていたとみられる。
研究チームはまた、**ダマジカやガゼルなどの動物の骨**も発見した。
これは、大規模な**ヒト族集団が洞窟で共同生活を送り、野生動物を狩り、火を利用**していたことを示唆する。**「複雑で豊かな集団生活が営まれていたことを示している」。**
シメルミッツ氏は6月11日にイスラエル外務省が公表した声明で述べた。
しかし現在までのところ、この時代の洞窟からは重要な人類の遺骨は一つも発見されていない。シメルミッツ氏は声明で、フレイディスの洞窟について「世界的に見ても類を見ない重要な遺跡だ」と指摘。「このタイムカプセルは、**前期旧石器時代末という特異な時代に属している。**ネアンデルタール人と現生人類が優勢となり、多くの地域へ広がる直前の時期だ」と説明した。「この重要な時期に属する遺跡は、イスラエルやより広いレバント地域でもごくわずかしか発見されておらず、そのほとんどは研究目的で立ち入ることができない」と、シメルミッツ氏は付け加えた。バルディ氏によれば、研究者たちはこの洞窟で大規模な調査を計画している。それにはおそらく数年を要するとみられる。
「これらの洞窟の発掘における我々の**最大の願いは、**おそらく**ヒト族の化石を見つける**ことになるだろう」（バルディ氏）
「理解を一変させる」
英サウサンプトン大学の旧石器時代考古学講師アルマンド・ファルクッチ氏はCNNに対し、この発見は、これまであまり注目されてこなかった人類史の一時期についての理解を深めるものだと語った。同氏は今回の研究には関与していない、
「この時代（およそ40万年前から20万年前）は、アフリカとユーラシアの双方において、行動様式や技術が大きく変化した時期に当たる。そこには景観の中で洞窟が中心的な場所として集中的かつ繰り返し利用されるようになったことも含まれる」と、同氏は24日にCNNに語った。
また「**この遺跡で火が集中的に使用されていたことを示す証拠は特に重要だ**」とファルクッチ氏は強調。「まさにこの時期、そしてまさにこの種の遺跡において、火を習慣的かつ制御して使用していたことが考古学的に確認できるようになる。これは人類の進化における行動上の大きな転換点を示している」と付け加えた。
また、英スコットランドのエディンバラ大学で先史学・考古学年代測定の教授を務め、考古学部門の責任者でもあるカトリオナ・ピカード氏は、この研究成果について**「初期のヒト族の物質文化や生活様式に関する貴重な知見をもたらしており、その意味でこの遺跡はレバント地域の前期旧石器時代に対する私たちの理解を一変させる可能性を秘めている」**と語った。同氏は今回の研究には関与していない。　　CNNニュースより



イスラエル北部でネアンデタール人以前の年代に遡る洞窟





洞窟で見っかった
タマジカの歯の遺物

トピツク　33

人類の日本列島到達「北回りルート」に新たな手がかり冠遺跡から出土

ー「北回り」人類の石器群と同じ特徴ー



ホモ・サピエンスの移動ルート


１９８０年に冠遺跡から出土した石器群。大型石刃、小石刃、尖頭形剥片の「３点セット」がそろう＝奈良文化財研

国内最古の可能性がある約４万２３００年前の石器が発見された**広島県廿日市市の冠遺跡で**、１９８０年に出土した石器に、ユーラシア大陸を**「北回り」で東に向かった新人（ホモ・サピエンス）が用いた石器群と同じ特徴が見られる**ことが、奈良文化財研究所や広島県の分析で判明した。**国内で同様の石器群が確認されたのは長野県・香坂山遺跡**に次いで２例目。**人類が日本列島に到達したルートをたどる手がかり**として注目される。

分析は奈良文化財研究所と広島県立埋蔵文化財センター、同県立歴史民俗資料館の３機関が２０２３年から実施。約半世紀前の調査で出土したが、詳細が報告されていなかった石器約２９００点を再整理した。

再整理の結果、長さ１０センチ以上の鋭い刃を持つ**大型石刃**のほか、５センチ未満の**小石刃**、先端を三角状にとがらせた **尖頭せんとう 形 剥片はくへん** が確認された。これらの石器は、ロシア南部や中央アジアなどでも確認されている**「３点セット」と呼ばれ、北回りルートのホモ・サピエンスが用いた石器群として知られている。**

今回、石器とともに出土していた焼けた石を「熱ルミネッセンス法」と呼ばれる年代測定法で分析したところ、約３万７０００年前に遡ることが判明。「３点セット」が国内で初確認された長野県佐久市の香坂山遺跡の石器群も科学分析の結果、**約３万７０００年前のものと確認**されており、北回りルートで日本に到達したホモ・サピエンスは東日本だけでなく西日本にも居住していたとみられる。

約３０万年前にアフリカで誕生したホモ・サピエンスは約５万年前にユーラシア大陸に進出し、ヒマラヤ山脈を北回りで東に進んだ集団と南回りで進んだ集団に分かれることが確認されている。**冠遺跡では２４年に約４万２３００年前の石器も発見**されており、こちらは端をとがらせた尖頭器や直線的な刃を持つクリーバーなど中国や朝鮮半島などで出土している**南回りルートの石器群と特徴が共通る。**

研究チームの中心を担う奈良文化財研究所の国武貞克主任研究員は「大陸を北回りと南回りのルートで進んだ人類が冠遺跡で出会っていた可能性がうかがえる重要な成果。**２ルートで進んだ人類が日本列島で合流し、日本の旧石器文化を形成したという仮説の証明に近づいた」と語る。**

読売新聞より

トピツク　32

ピラミッドよりも昔なのに…湖底で見つかった古代の船が明かす、
ー古代の人々の超技術ー

＜古代の人々も、生物工学やシェアバイクなど、現代でも通用するアデアを持っていたようだ＞

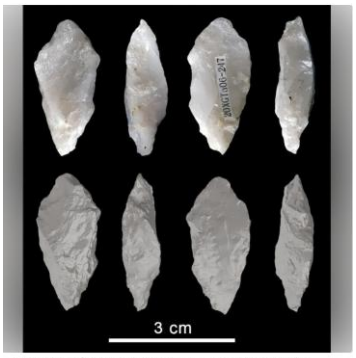
湖底に沈んだ太古の船が、古代文明の秘密を明らかにするかもしれない。
米ウィスコンシン州歴史協会の研究者らは、2021年にメンドタ湖の湖底で約1200年前のカヌーを発見したのを皮切りに、これまでに16隻の古代のカヌーを発見した。その中にはなんと、エジプトのギザの大ピラミッドが建設される以前に作られた可能性があるものがあるとゆうのだ。
放射性炭素年代測定により、発見されたカヌーがそれぞれいつ頃のものなのか、おおよその年代が明らかとなった。結果、最も新しいものは約700年前のものだったが、最も古いものは約5200年前のものだと分かった。本当に5200年前に作られたとすれば、そのカヌーはエジプトのギザの大ピラミッド建設よりも古く、シュメール文字発明とほぼ同時期ということになる。
この発見は、米五大湖地域で、数千年にわたり繁栄していた文明が存在した可能性を示しているだけにとどまらず、当時の人々が耐久性のある水上交通手段を製作する技術と知識を有していたことをも示した。研究者らはカヌーを移動手段として利用しただけではなく、いくつかのカヌーの中から網の重りが発見されていることから、魚などの天然資源を確保するためにカヌーが使用されたと考えているようだ。

生物工学やシェアバイクも、古代から存在していた？

メンドタ湖で発見された最も古いカヌーは、五大湖地域で発見されたカヌーの中で最古のものであり、北米東部全体でも三番目に古いものだ。
16隻のカヌーのうち半数は、レッドオークまたはホワイトオーク（いずれも北米原産のナラの一種）で作られている。特に、水を吸収しやすく、通常は水上用の船体には使用されないレッドオークを使用したという点は研究者たちの興味を引いた。オークが用いられた理由についての現在有力な説は、オークは傷や感染症、加齢といったストレスを受けると、「チロース」と呼ばれる細胞の突起を形成する性質があるからというものだ。チロースは水の移動を妨げ、菌類や細菌の広がりを防ぐだけでなく、木材の耐水性、浮力、腐敗への耐性を高める働きを持つ。
ウィスコンシン州歴史協会の海洋考古学者タマラ・トムセンは、「カヌーの製作者たちは、嵐などで損傷した木を意図的に選んでいた、あるいは成長過程で意図的に傷つけてチロースの形成を促していた可能性がある」と語る。
「バイオエンジニアリングは現代的な技術だと考えられがちだ。しかし、その概念が生まれる20世紀半ばよりもはるか昔から、同様の発想が存在していた可能性がある」
また、これらのカヌーは大きく分けて湖の2カ所から発見された。研究者たちはこれを、特定の地点間の移動を可能にし、天然資源確保を容易にするため、戦略的に配置されたことの証だと見ている。さらに、これらのカヌーは個人所有ではなく、共同体の中で共有され、特定の場所に保管されていたと考えられている。これは、現代のシェアバイク制度に似た仕組みともいえる。スペリオル湖チペワ族バッドリバー・バンドの部族歴史保護担当官ラリー・プルチンスキーは、これらのカヌーについて「洗練された移動ネットワークと、相互につながった共同体の存在を示すものだ。古代の人々は卓越した技術と知識を駆使して、この土地で生き抜き、繁栄していたのだ」と語った。「そして我々も今、同じ土地で生き、繁栄している」古代の人々の知恵は、現代人の我々から見ても、なかなか侮れないのかもしれない。

トビツク　31

6万年前の「中国製」に世界の科学者が困惑―米メディア







中国メディアの環球時報は7日、「16万年前の“中国製”に世界の科学者が困惑」との米ニュースサイト・ライブサイエンスの記事を紹介した。

記事は、「16万年前、中国に存在した古人類は私たちの想像よりもはるかに進んでいた」とし、このほど学術誌「ネイチャー・コミュニケーションズ」に掲載された論文を紹介。この研究は中国科学院古脊椎動物・古人類研究所の研究者が主導し、多国籍の科学チームが行ったもので、中国中部での新たな発見が、東アジアで**16万年前から7万2000年前**の間にすでに**高度な石器製作技術が存在**していた可能性を示す証拠になるという。

研究チームは、中国・河南省南陽市淅川県の西溝遺跡で発掘調査を実施し、この地域の古人類が長期間にわたり高度な石器製作技術を維持していたことを明らかにした。これは、従来の学界の認識を上回る適応力と創造力を示すものだという。この時期、中国には脳容量の大きい複数の古人類が存在しており、竜人（ドラゴンマン）、ホモ・サピエンスなどが含まれる。

複数の測定の結果、西溝遺跡の文化層（遺物包含層）は約16万年前から7万2000年前に至ることが分かった。また、出土した2601点の石器の研究から、当時の人類は精緻な技術で小型の石片や規格化された道具を製作していたことが判明した。製作技術には体系的な特徴が見られ、多くの小型工具に確認される整った加工痕は、高度な技術水準と標準化された生産工程がすでに確立されていたことを示しているという。中でも最も重要な発見の一つは、東アジアにおいてこれまでに確認されている**最古の「柄付き石器」の証拠が出土**したことで、これは同時に最古の複合工具でもある。これらの技術は石製部品を柄や持ち手と結合するもので、綿密な設計と高度な加工技術を示しているとともに、当時の人類が異なる素材を組み合わせることで道具の性能を高めることを理解していたことを示しているという。

記事は、「今回の発見は、中国における初期古人類の技術が長期間ほとんど停滞していたとする従来の見方に疑問を投げかけるものだ。この遺跡の地層は約9万年にわたる時間幅を持ち、この時期に中国の古人類の多様性が増していたことを示している」と伝えた。

ヤフーニュースより

トピック ３０

福岡平野東部「古代の糟屋」は大宰府の交通・物流拠点だった…
発掘調査で注目、役所跡・港湾施設など分析進む

かつて筑前国糟屋（かすや）郡と呼ばれた福岡平野東部で進む、**古代の官衙（かんが）（役所）跡**の発掘調査が注目されている。文字資料に記録された施設などの名称と、遺構や出土遺物の分析から、この地が古代の九州を統括した大宰府の交通・物流の拠点だったことが明らかになってきた。

（白石知子）

福岡市のベッドタウンとして発展する福岡県粕屋町。須恵川右岸に南北４００メートル、東西９００メートルにわたり広がる標高６～８メートルの微高地に、古代の糟屋郡の役所跡、**阿恵（あえ）遺跡群**がある。

一帯は九州大学の農場だったことから開発を免れており、２０１３年から続く町教育委員会の発掘調査で、「コ」の字形に並んだ長辺４０メートル以上の大型建物跡、１辺４～８メートルの建物跡１５棟などが見つかった。前者は政務や儀式を行う政庁、後者は租税のコメなどを収める倉庫（正倉（しょうそう））の遺構で、飛鳥時代の７世紀後半～奈良時代の８世紀に営まれた。遺跡を横切る形で幅２１メートルの道路跡も確認された。

京都・妙心寺にある国宝の梵鐘（ぼんしょう）の銘文には、＜糟屋評造舂米連広国（こおりのつくりつきしねのむらじひろくに）＞という、当時の糟屋郡トップ（評造）の名が記されている。地方行政単位の郡は**７０１年の大宝律令以前は「評」**と表記されており、銘文にある鐘の鋳造年「戊戌年」は６９８年と考えられている。

「この政庁跡で舂米連広国が政務を行っていたと考えられます」と、調査を担当する西垣彰博・社会教育課主幹。**評から郡に至る地方官衙の変遷を追うことができる**として、２０２０年に阿恵官衙遺跡の名称で国史跡に指定された。

万葉集に登場する「夷守駅家」跡か

約７００メートル北の内橋坪見遺跡（粕屋町）では１２～１３年の発掘調査で、長辺２０メートルを超える７世紀末～８世紀前半の大型建物跡が確認された。朱塗りの柱の存在を示す赤色顔料や大宰府式鬼瓦の出土、また大宰府と都を結ぶ駅路（幹線道路）の推定ルートに接し、博多湾の志賀島を望む立地から、**万葉集に登場する「夷守駅家（ひなもりのうまや）」跡とみられる。**

その万葉歌＜草枕旅行く君を愛（うるは）しみ副（たぐ）ひてそ来し志賀の浜辺を＞は天平２年（７３０年）、都に戻る使者を送る宴（うたげ）が夷守駅家で催されたときに大宰府の役人が詠んだものである。「君との別れが名残惜しく、志賀島を望む浜をともに歩いてきた」といった意味だ。

志賀島につながる砂州（海の中道）では漁労集落跡が発掘されており、大宰府直轄の海産物の調達先と考えられている。内橋坪見遺跡の周辺では宴会用の食器も出土しており、松川さんは「夷守駅家は、海産物を調達するうえでも都合のよい立地。広い意味での大宰府の境界で、送別の宴を催す場としての位置づけだった」とみる。内橋坪見遺跡から約７００メートル北西、当時の河口に近い多々良込田遺跡（福岡市東区）でも、鬼瓦や貿易陶磁器が出土している。西垣さんは「港湾施設としての性格が想定でき、夷守駅家を後にした人々がここで船に乗り換え、都に向かったことも考えられる。古代の糟屋郡が、陸海交通の要衝でもあったことがうかがえる」と話す。時代をさかのぼると、**日本書紀の５２８年の記事には、ヤマト王権に反旗を翻した筑紫君磐井（つくしのきみいわい）の子である葛子（くずこ）が「糟屋屯倉（みやけ）」を献上したことで助命されたとある。**屯倉とは倉庫や官舎を伴う王権の直轄地をいう。糟屋の地が古墳時代から交通や物流の結節点だったことを示すもので、一連の遺跡は磐井の余徳とみることもできそうだ。



阿恵官衙遺跡で確認された政庁跡とみられる柱跡　粕屋町立歴史資料館提供